

覚如上人の伝道

葛 野 洋 明

はじめに

浄土真宗本願寺の第三代宗主である覚如上人は、一人特異な立場であった。またその著作には独自の見解も記されており、そこから浄土真宗における伝道に関して、基本にして重要な点が示唆されていると思われる。

ここでは覚如上人の伝道を評価したり、その成否、功罪を論じるのではなく、浄土真宗における伝道の基本にして重要な点は一体どこにあるのかを、覚如上人の著作から伺おうとするものである。

一 覚如上人の立場とその特徴

覚如上人の立場は開祖の親鸞聖人ともその立場は大きく異なり本願寺の歴代宗主の中でも一人特異な立場であったと言わざるを得ない。

親鸞聖人においては師弟関係を構築し、寺院を建立して教

団を形成しようとする意思を見いだすことはできない。ただひたすら師の法然聖人から聞き受けた念佛往生の法義を自らも歩み、また縁ある者に説き伝える生涯であったと言つても過言ではないだろう。

また本願寺中興の祖と呼ばれた第八代宗主蓮如上人は、当時衰微した本願寺を建て直し、寺地を拡大し門徒を急増させ本願寺を再興させた。何よりも親鸞聖人が説き明かした浄土真宗という法義を再び明らかにしたところに中興の祖と呼ばれる由縁がある。

この二師の立場と覚如上人の立場は大きく異なっていた。

親鸞聖人往生以後、いまだ面授の直弟が関東各地に門弟集団を形成している情勢のなか、親鸞聖人の廟所を寺院化して浄土真宗の総本山化しようとするところに覚如上人の特異な立場があった。覚如上人は、関東の直弟・門弟集団からは親鸞聖人の曾孫であるが、親鸞聖人に直接面授をうけていない者であり、単なる廟所の管理者としてしか認知されていないかっ

たのである。その立場の覚如上人が「三代伝持の血脈」を主張し、廟所から寺院化し、そこに浄土真宗の本山化を意図したのであるから、その立場と背景は他の祖師方とは大きく隔たっていると云わざるを得ない。

この様に覚如上人は親鸞聖人往生以後の真宗草創期に本願寺の基礎を築いたところにその功績をみるのである。本願寺として、その基礎の土台は覚如上人によって成し遂げられ、蓮如上人によって結実されたと評価されている。真宗草創期に本願寺を実質的に創建し、基礎を築いた覚如上人の著作を伺うことは、いわば親鸞聖人の説き明かされた浄土真宗という法義を、承け伝えていくことの基礎が明らかになると言えるであろう。

覚如上人の行実や、その教義を伺う時に必ず問題とされるのは、法然門下の浄土異流と真宗内の他派に対することである。浄土異流に対し、また真宗他派に対していかに親鸞聖人の流れを汲む本願寺教団が正統であることを説き明かし続けたのが覚如上人の生涯であったと言っても過言ではない。その代表が「信因称報」「平成業成」等の教学的特徴である。

親鸞聖人の法義を伝承する草創期の覚如上人の著作は、何よりも親鸞聖人の法義を顕正し闡明にすることにあったことから、ことに伝道に関してもその基本にして重要な点は、何を聞いても親鸞聖人の顕正された浄土真宗という法義を顕正

し闡明にする点にあったと指摘できるであろう。

二 覚如上人の伝道に関する具体的示唆

覚如上人の著作には僧侶や門弟の行儀についても取り上げ、浄土真宗の念佛者としてどうあるべきかを述べている点も多い。そのなかには伝道に関して具体的に示唆されているものが多く見られる。覚如上人の著作は多数挙げられるが、そのなか「口伝鈔」（三一三）には如信上人から面授した親鸞聖人の物語として、法然門下で唱導（説法教化、布教伝道）に秀でた聖覚法印から聞き受けた親鸞聖人が、その説教を一言漏らさず再説したことで、師の法然聖人の前で、面目を得たことに對し、親鸞聖人が名聞利養の爲に行う不浄説法となる唱導を固辞したことが記されている。これが史実に基づくか否かは不明であるが、親鸞聖人は「名利に人師をこのむなり」（二一五三二）と慚愧し、弟子を持たないと公言されていたこと等から、名譽を得るために行う唱導・説教を固辞したことは首肯されるところである。

いま覚如上人が「口伝鈔」にこの一段を設けたのは、法然門下において親鸞聖人が如何なる位置にあったかを示し、浄土異流に対して親鸞聖人こそ法然浄土教の正統な流れであることを明らかにする意図があったことは否めない。しかし親鸞聖人が名利の爲の唱導を固辞し、不浄説法の咎を示された

と覚如上人が記されているところに、真宗の伝道の基本的姿勢が伺える点を指摘したい。

次に覚如上人の著作のなかで伝道に関する点には「善知識」の語を多く見ることができる。例えば『口伝鈔』には「平生に善知識のおしへをうけて信心開発する」(三一二八)とあり、『執持鈔』には「このたびもし善知識にあひたてまつらずば・」(三一三八)、『本願鈔』には「他力不思議の信心を、善知識ありて、つたへときてさづくるを・」(三一五五)と記している。これらの文は後の蓮如上人において五重義相として論じられるものとなる文でもある。

『願願鈔』には本願成就文を釈すなかに「聞といふは善知識にあふて本願の生起本末をきくなり」(三一四七)とあり、また『最要鈔』にも成就文を釈して「聞は、善知識にあふて如來の他力をもて往生治定する道理をききさだむる聞なり」(三一五一)と同様に「善知識」による聞であることを記している。同じ本願成就文を釈しても親鸞聖人は「信文類」には「言聞者衆生聞佛願生起本末無有疑心是日聞也」(二一七二)と釈し、『一多文意』には

「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。聞くといふは、本願をききて疑ふころなきを聞といふなり。

と示し、善知識については言及していないことから伺うと、

(二一六〇四)

覚如上人の伝道(葛野)

覚如上人は殊更「善知識」による信心獲得を強調されていたと見てよいであろう。

「善知識」を強調した覚如上人であるが、そのなかでも特に『改邪鈔』には具体的に言及し、「知識帰命」と呼ばれる異解についても触れている。以下『改邪鈔』の内容に即して「善知識」について論究してみたい。

『改邪鈔』には「願力不思議の佛智をさづくる善知識の實語を領解せずんば往生不可なり。」(三一六五)とあり、やはり善知識に依ることを強調されている。しかし善知識を如來と仰ぎ、知識の外に別の佛なしとする、いわゆる知識帰命と呼ばれる異解については、第一八条に、

本願寺の聖人の御門弟と號するひとびとのなかに、知識をあがむるをもて彌陀如來に擬し、知識所居の當體をもて別願眞實の報土とすといふ、いはれなき事。

(三一八四)

と題して論破している。善知識の外に別の佛なしとする知識帰命は聖道の宗義との混乱であるとして、凡形の知識を佛とすることは浄土門にはあり得ないことと明快に破している。またこの知識帰命を破す一段には眞実なる善知識とは如何なるものが反願されている。第一八条を伺うと、

善知識において本尊のおもひをなすべき條、渴仰のいたりにおいてはその理しかるべしといへども、それは佛智を次第相承しまします願力の信心、佛智よりもよほされて佛智に歸屬するところの

一味なるを仰崇の分にてこそあれ、……中略……ただ實語を伝へて口授し、佛智をあらはして決得せしむる恩徳は、生身の如来にもあひかはらず、木像ものいはず經典くちなければ、つたへきかしまむるところの恩徳をみみにたくはへん行者は、謝徳のおもひをはらにして、如来の代官とあふいであがむべきにてこそあれ、その知識のほかは別の佛なしといふこと、智者にわらはれ愚者をまよはすべき謂これにあり。あさましあさまし。

（三一八六）

とあり、善知識を本尊や生身の如来と仰ぐことはあり得ることを示している。しかしそれは知識の外に別の佛なしと見るのではなく、渴仰の思いからであるとしている。その渴仰も善知識と一味にして、佛智に帰属する故に仰ぎ崇めることもあるのだと示している。また如来の真実なる語を口伝し、信心決定せしめるからであり、經典に説かれた法義を伝えることを指して「如来の代官」と仰ぐべきものとしているのである。ここに真の善知識とは如何なることが明らかにされている。

覺如上人は先述の通り善知識による信心獲得を強調されたが、その善知識は上述のごとく真の善知識に依らなければならないとされていたのである。

さて、『改邪鈔』には知識帰命を論破するだけでなく、知識と同行の行儀についても、その具体的な相を挙げて浄土真宗にふさわしくない点第四条から第九条にわたり指摘し、顕正

している。どの条項も知識が教化者意識により同行を下に見たり、私有化し与奪し、また起請文を書かせたり、与えた聖教・本尊を取り返す等の浄土真宗にあるべからざる相を批判している。

覺如上人のこれらの批判は第四条に親鸞聖人の言葉として、それがしはまたく弟子一人ももたず、そのゆへは彌陀の本願をたもたしむるほかはなにごとをおしへてか弟子と號せん。彌陀の本願は佛智他力のさづけたまふところなり、しかればみなどもの同行なり、わたくしの弟子にあらず

（三一八八）

と記している如く、「名利に人師をこのむなり」と慚愧し、共に真佛弟子であり、御同朋・御同行とされた親鸞聖人の門弟・同行に対する意許に即したものであった。

これら覺如上人の指摘によると、浄土真宗の教化の場に立つ者とその教化を受ける者の関係は、同じく阿弥陀如来に摂取されていく真佛弟子であり、如来の一子地であり、仰崇の思いで師と仰ぎ、善知識と仰ぐことはあつても、自らが教化者となり、師である・善知識であるとすることはあり得ないと言わざるを得ない。

三 浄土真宗の伝道の基本

以上の如く覺如上人の著作に示唆される点から、特に浄土真宗の伝道に関する基本にして重要な点を挙げると、覺如上

人は善知識に依つて信心獲得せしめられると強調していたことが明らかとなった。その善知識とは「ただ実語を伝へて口授し、佛智をあらはして決得せしむる」のであり、「木像ものいはず經典口なければ、伝へきかしむる」のが真実なる善知識であるとするのである。

果して凡夫が真の善知識たり得るのであるうか。臨終まで悟りの一分も証得し得ない凡夫にとつては「ただ実語を伝えて口授し、佛智をあらはす」ことは不可能であると言わざるを得ない。また經典の内容を「伝へきかしむる」ことも究極的な意味においては如来以外には無理である。凡夫が如実に如来の実語を讃歎し、他の衆生に伝道できることは如実讃嘆といわれる「他力の称名」の外はないであろう。

それは親鸞聖人が『尊号真像銘文』に「稱佛六字即嘆佛即懺悔即發願廻向」の文を釈して

南無阿弥陀佛をとふるは佛をほめたてまつるになると也…中略…また一切衆生にこの功德をあたふるになると也。(二一五八七)と著している如く、他力の称名は仏徳を讃歎することになり、「一切衆生にこの功德をあたふるになる」からである。

浄土真宗における伝道の基本的にして重要な点は、教化の場に立つ者は如実に佛徳を讃歎することに尽きるのである。それは約めれば信心の行者の他力の称名であり、また讃歎される佛徳を仰ぎ、敷衍して親鸞聖人の説き明かされた浄土真

宗という法義を顕正し闡明にすることとも言えるであろう。もちろんそこには教化者という立場をとらず、共に如来に摂取されていく同行としてあるべきことも、覚如上人の著作を伺うことによつて明らかにすることができた。

以上、覚如上人の著作の示唆により浄土真宗の伝道の基本にして重要な一端が明らかになったものと考ええる。

(一) 内の頁数は『真宗聖教全書』による

(キーワード) 覚如上人、伝道、善知識、称佛六字即嘆佛

(龍谷大学非常勤講師)